

GR
白雲軒

とりね



25

昭和48年1月1日

宗教法人

鳥居観音

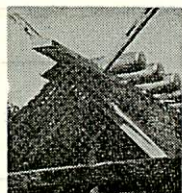
表紙写真 天蓋の説明

- 表紙の天蓋は、救世大観音堂宇内の両側に安置してある吉祥天と、不動明王を荘厳にするため、その天井に吊してあります。
直経2.6米ありますが、高い所なので小さく見えます。
- この天蓋の中央に高さ0.8米位の真鍮の灯籠が吊してありますが、これは「アラビアンナイト」で有名なイラン国で買って来たものを利用したので、中に水銀灯をつけたところ、内面のイラン式鏡のモザイク張りに反映して幻想的な妖しさをかもし出しています。
- 「イラン」では、さすがにホテルでも食堂でも寺院でも至る所に吊してある真鍮打出し彫の灯籠で、その透し彫りは実に細密で美しいものです。
- 天蓋の形は八角で、八個の象の彫刻の鼻から、2.2米の瓔珞ようらくが吊してありますが、之は堂宇にマッチさせるため寺院にあるのとは全く違ったデザインであります。
- 八角形の周囲をかこんでいる天女像は電光型に上下してあり、最も苦心したのですが、下から見上げるのでそのデザインは目立ちません。
- 炎熱の砂漠にさいなまれていた民衆は、夜の涼を求めたり、「アラビアンナイト」のような奇想天外を夢見たがるは、自然の要求でありますし、私はこの天蓋を見ていると、心は「イラン」に遊ぶのであります。

とりゐ 1月1日発行 25号

目次

表紙	救世大観音堂宇内大天蓋	
表紙裏	大天蓋の説明	
丑年に思う	桐江	二
御法話瓊仙いかだ集より	(其の八)	七
西遊記	(其の二〇)	十一
謹賀新年御芳名		
田舎医者	(其の五)	十六
老万體観音奉納者御芳名	(其の十一)	二〇
写経塔工事経過		二一
写経折本申し込み用紙		二二
観音だより		二三
裏表紙	鳥居観音案内図と諸行事のお知らせ	



丑歳に思う

八十一翁

桐江

新年おめでとごうございませう

本年は丑年であります。牛は近年人間の食生活に、米穀につぐ重要なものになって参りましたので、本年こそ吾々日本人の身近に感ずる意義深い年であります。

鳥居観音発行の「とりゐ」も、皆様のご声援のお蔭をもちまして第二十五号（六才）の春を迎えることが出来ました。何卒本年も引続きご愛読の程お願い申し上げます。

白雲山鳥居観音も、救世大観音が建立されて、先年の夏NHKテレビの「町から村から」の放送の影響もあって、最近、信仰者や、レジャーの方達のご来山が増加して参りました。是も、皆様のご声援の御蔭と存じます。

私は、今迄、鳥居観音の建立にのみ重点を置いて参りましたが、参拝の方々の信仰心の深いのに感激させられ已に八十一才の春を迎えましたので、いくばくもない余生を大慈大悲の観世音菩薩の指導にしたがって、世界平和と人間性の高揚に尽し、参拝の方々の、ご便宜をはかりたく、又事務局一同も、精心誠意、努力致しますので、どうぞ、お誘い合せご来山下さいますよう、お待ちしております。

昨年、小林高安老師を、専任僧侶としてお迎えいたしました。老師は、中国を中心に永く布教師として巡錫され、広い体験をお持ちです。戦後、大船観音の僧侶として活動せられて、大船観音の今日をあらしめた方です。

老師のご法話は、必ず心の糧となります。

伊勢神宮御遷宮式

伊勢神宮は、二十年目毎に御遷宮式が挙行されま
す。戦争のため三年おくれて、昭和二十九年に第五
十九回の遷宮式が行われました。

私は此の時、埼玉県の御遷宮奉賛会長をつとめさ
せて頂きまして、県民の皆様から、自主的に、奉納
をお願い致しました処、非常な協力があつて、埼玉
県に対して、二千七百余万円の割当でしたがそれを
はるかに突破致しました。

お蔭で、伊勢神宮に於て開かれた、評議員会の議
長を勉めさせて頂きました。

其遷宮式当日には、大野伊右衛門氏と、私が勅任
官待遇で参列の光榮に浴しましたが、真夜中の行事
ですから、かがり火と松明の行列でして、二千何百
年昔、そのままの仕来たりによる、幽玄な儀式に参
列出来て、心引きしまる感激に浴しました。

この式は五時間もかかりますから、其の間小用に

立つ事が出来ませんので、前日から、水をのみず、
餅を食す等の注意をうけました。

私はその時の感激を忘れ得ず、名栗村の星宮神社
の元旦の式に、拝領した、衣冠束帯を着用して参列
し、拝殿から伊勢神宮を遙拝したのですが、何し
る吹きさらしの社殿の寒さは、高血圧にわるい
と医師に注意されたため、数年で中止しましたのは
残念でした。

伊勢神宮評議員会と

両陛下御渡欧

一昨年六月に伊勢神宮の評議員会に出席しまし
た。参議院や、緑化推進委員会でご懇意を願ってい
る。徳川宗敬先生が、大宮司をお勉めなので、其の
英姿に接し度くもありまして、幸いにお目にかかれ
て、ご多忙の処を、二十分位お話をうかがいました。

出席者五百名の方々は皆、神宮の二の門内の玉砂
利の庭で、手が足のくるぶし迄とどく程の最敬礼を
なされる、その宗敬心の強さには、まったく、心が

打たれました。

この日三日前、天皇、皇后、両陛下には、五十年



村社星宮神社拝殿にて暁の新年祝賀式に参列の筆者

ぶりに、欧州数ヶ国をご訪問遊ばされるので、伊勢神宮に、ご奉告参拝なされたとの事ですが、先年皇居の年賀参拝の折りに、パチンコの玉を、両陛下に向って投げた馬鹿者が日本人にもいる位ですから、大東亜戦の悪影響等で、両陛下が、ご不快な事がありではないかと、日本人一同心配したものです。そして、この時も、太々神楽の、のりとにも、また評議員会の折りにも、君ヶ代を唱い、黙禱して、両陛下のご無事、ご帰国をお祈り申上げる真剣な姿は、伊勢神宮の宗教者代表なればこそと、しみじみ痛感いたしました。

第六十回の

御遷宮式と神宮夜景

本年（昭和四十八年）は、第六十回の御遷宮式典が行われるのですが、募金総額は全国で、一昨年已に三十億を越えております。

埼玉県は、七千万の割当を突破しておると云う県民の宗敬心の強さには感激しました。

何しろ御遷宮には、檜の良材、三万八千余石、屋根用の茅三万余束、刀六十振り、錦の旗のついでいるホコ六十本、其他何百種の調度品全部、新調なので、実に大変です。

私はこの時宇治橋近くの旅館に泊ったので、夜、境内を散歩しましたところ、何十万とも知れぬ沢山の虫の音楽が、遠く近く幽邃な神域を覆っておりまして、あだかも八百万やおよろの神々がこのうつ蒼たる神域に集っておられるのではないかと、何とも云えぬ崇高な感に打たれて、心が引しまる思いでした。

日本民族の誇るべき伝統

神武天皇が、ご東征の時、紀州辺の海岸に上陸されたとか、そこにも勿論、古事記によってでしょうが、石塀のある記念碑が、老松の間にあるのを見た記憶がありますが、そこより各地に転戦されて、うねび山麓にて皇位につかれ、第一代の神武天皇となられてから百二十四代と云う、皇統連綿たる、世界

にも珍らしく輝かしい歴史を、吾々日本人がもっていますことは、最も日本民族の誇りとすべきものであります。その節、神武天皇の御陵にも参拝しましたが、神々しく、吾々の最も古い祖先のお墓参りをしたような、身近かな感じがいたしました。

日本のように、古い歴史をもつ国で始めは文字もなかった時代ですから、口伝を書いた日本書記や古事記は、神話、伝説のようなものが、多少あることは止むを得ぬが、戦後この輝かしい歴史や、建国記念日を軽視しているのは、いかんともなざけないことです。

イスラエルは、五千数百年前の建国日を、今でも紀元として厳守しており、又これを誇りとして、西暦など見むきもしません。このように、その民族の歴史を尊重している国は、他にも多々あると思います。

大和民族も、世界に珍らしい、そして皇統連綿としての民族を、誇りとすべきです。

昨年、日中条約が締結されたことは、東洋の平

和、引いては世界のため、全く喜ばしい事です。そのためにも吾々は、祖先が築き上げた貴重な歴史と、二千年の間祖先のきたえたよい伝統を根幹として、世界に誇りうる特長ある、民主国家の建設に勉めましょう。

神仏混淆と民族の使命

仏教も吾々の祖先を大切にし、之をお祭りする事を使命としています。吾々の祖先である神社を中心にしていた時代もありました。

たとえば北条政子が山木判官との結婚式場から逃げて、伊豆山神社にかくれたり、又頼朝が、石橋山の戦いに破れて、伊豆山神社に逃げこんでも、神社を守護する僧兵三千が居たため、どうすることも出来なかつたとの事です。

又大宮の氷川神社にも之を守る七寺院があつたと云われます。このように神仏混淆の時代が永かつたのですが、明治維新に神を冒瀆すると云うことか

ら、神仏分離となり、ために、仏教は痛手をうけました。沢山の寺をこわし、仏像等を庭で焼きすてた等は、国の大切な文化財をメチャメチャにしてしまつたことは、残念なことです。三峰神社の仁王様も大きいので、或る木挽が之を切りくだいて、やきすてた処、そのたたりで悲惨な死を招いたと云う話も残っています。

併し敗戦による占領政策で、神社を圧迫し、公的援助は全くなくなりました。

伊勢神宮もその通りですが、現在では経営者の努力により、神仏共に発展して来ました。そして人間性をとりもどしつつありまして、エコノミックアニマルと云われる迄に物質万能や、公害世界一と云う悪名をもつ日本民族の救済に全力をつくしていることは日本民族将来のため誠に喜ばしいことです。

今こそ吾々日本人は、一丸となって、此の努力しつつある宗教を広め人間性尊重に、又世界の平和に努力せねばならぬと存じます。



道光禪師
(故高階瓏仙猊下)
御法話

(其 八)

生活即佛法

そもそも仏教が、みなさまの日常生活に、どれだけ関係づけられるものであるかと申しますと、かたんに考える人は、家庭に仏壇をそなえて、祖先のまつりをいとなむようなところに関係がつくられていどに思っている方もあります。それも家庭の日常生活の上に関係づけられている大切な仏教観念ではあります。

けれども、私がお話したいことは、おのおの自分の立場にあつて、實際生活を支配する仏教意識、信念を、もとめていただきたいのであります。

なんとすれば、仏教の本質から申しますと、すべての人の日常生活は、本来仏法でないものはないのであります。それをいつの時からか、ふみちがえるようになつたので、世法と仏法とを別に考えるようになりました。それが仏教から申しますと、逆ということであります。ゆえに仏典に、

「世法の中に仏法なく、仏法の中に世法なし」と云うことばがあります。

これは世俗の方から見ると、世間と仏法とは別々に思われて、「あれはお寺の仕事、僧侶の仕事」、口の悪い人は「坊主の仕事、われわれは用事はない」などというように、仏教をひきはなして考えますけれども、仏教の生命からみますと、世俗と仏法とひきわけるものでなく、在家の人の実生活もみな仏法として見通すのであります。故にまた。

「仏事門中不捨一法」

とも申しています。仏事とは仏のことと書いてあります。すなわち仏法の作業のなかには、不捨一法といつて、一つも捨てるものはないということであり

ますから。これは社会の動きをみな仏法の仕事として、とりあつかうのであります。

いわゆる在家の人の生活であるところの、治生産業を、みな仏法の活動とするものです。

ゆえに道元禪師は

威儀即仏法

作法是宗旨

と声明していられます。威儀とはおたがいの立居振舞のことであります。それは行往坐臥という。行く事、住まう事、坐す事、臥する事、それを人間の四つの威儀と申しておりますから、ここから自然、威儀が正しいなどという字があります。ゆえに今申しました通り、ねるも、おきるも、立居振舞いの威儀をはなれて別に仏法はないぞ、ということ。また作法といえは、男は男、女は女、父は父、母は母、子は子、商人は商人、労働者は労働者で、それぞれ人の身分に應ずる働き方があり、それを作法といえます。その各自の作法のそのままに、宗旨の生命が存在しているというのであります。

ですから、私達の働きのそのままに、仏法の生命が存在しているそのことを、威儀即仏法、作法是宗旨といったものであります。

さればある一修養僧がむかし、有名な青原禪師（中国吉州青原山にいた人）のところにいて、

「いかなるかこれ仏法の大意」

と尋ねたことがあります。青原の返答は、

「蘆陵ろりょうの米作曆その佃ちんぞ」

と問い返されました。それはこの僧が仏法というものは、現実をはなれて、別になにか、もったいらしいもののあるかのようにさがしましたから、

「道は、近きにあります。」

ということを教えたのであります。

青原和尚のまことに親切なる返答であって、

「おまえは蘆陵ろりょうの者というが、蘆陵は米の産地である。今米佃は何ほどしているか……とまことに平凡なところに、仏法の大意を見せられようとしたものであります。

また、ある時、同じ修業にはじめて出たばかりの

僧が趙州禪師（中国曹州の人）のところについて、

「私は、はじめて仏法修行の道に、はいってまいりました。道を求めるには、どうすればよろしいか、お示しください。」と尋ねました。趙州は、

「そうか、お前は、今朝お粥を食べたか」

（禪宗の僧堂ではお粥ときまっている）と問い返すと、

「食べました」と答え、すぐ言葉をついで、

「お粥がすんだら、茶椀を洗っておけ」と教えられました。

これらを見ましても、仏法は目さき、手さきがわかります。これはみな、「公案」と云って、禪宗の一つ一つの問題としてありますが、これらは実儀即仏法のお示しであります。

また薬山禪師（中国山西省の人）と云うかたは、李翱という居士が仏法を問うたのに答えて、「雲は青天に在り、水は瓶に在り」

と示されました。その意味がわかった李翱はその時の様子を詩につくっておりませんが、その中に、

「われきたって道を問えば余説なし、雲は天にあり、水は瓶にあり」

と目に見た通りのことで聞かされた、と申ししております。これらの意味をあじわい得ましたならば、水一ぱいのあつかいにも、茶椀一つの運びにも、仏教の生命がこもっているということに気がつくはずであります。

仏法は障子の引き手、蜂の松

火打ち袋に うぐいすの声
と云う道歌もあります。

これによりますと、障子の開け閉めには障子の法がある。それが仏法だ、また、

「古松般若（仏智）を談ず」

といつて、障子を開けて、向こうの山を見れば、松の木が自分の姿と色を、おしままず見せているのも仏法、火打ち袋（今のマッチ）の一本のあつかいにも法がある。法にかなうところがすなわち仏法である。うぐいすの声も、鳥の声も、仏法の生命は一切の時、一切のところ、一切の事々物々に存在している

ことを知らしめたのであります。

なお、それだけでなく、おたがいの全身以外のものではありません。なんとなれば、仏教は大宇宙の真理を生命としてありますから、真理の通っているところは、みな仏法であります。ゆえに天地の現象である、日月の運行も、山の高さも、水の流れるのも、柳の緑も、花の紅も、松の曲れるのも、竹の直きも、人も、人のはたらきも、真理でないものは一つもないのですから、仏法でないものは一つもありません。これが仏法のなかに、世法なしということであります。

すなわち仏法の道理のがわからみれば、みな仏法で、そこに気がつけば、私達は本来、宗教生活をしているのです。けれどそこに自然の溝ができて、宗教的生命を見失ってしまっていますから、世法と仏法とはなればなれになっているのであります。それを仏法では迷いといい、あらゆる罪悪もそこに含まれてくるものであります。

それで日常生活を自分一人でなく、一切の衆生と

ともに、仏教生活を浄化させようとするために、華嚴経には、次のように教えられております、そのいくつかを申し上げます、

- 一、毎朝、洗面所にいたって、歯をみがく楊子をとる時は、願わくは衆生とともに、妙法を得て、全く清浄となりたい。
- 一、楊子をかむにあたっては、願わくは衆生と共に、心を清浄にして、もろもろの煩惱をかみつぶしたい。
- 一、食卓に向つては、願わくは衆生と共に、如来の甘露の法味をいただきたい。

(以下次号)

納経塔建立中

三信工業株式会社

電話(三三二)九五五一



西遊記

(其の二〇)

岡 部 千 三

ま も の

二人は門を力一ぱいにたたいたが、中からは、そのうけこたえもない。

「ええ、めんどろくさい、ぶちこわしてはいろう。」
氣のみちかい八戒は、うんうんうなって、門をおしたおそろうとしている、又悟浄のやつは、鉄の棒を振り上げて門にたたきつけていた。

「何だ、うるさいぞなものだ。」
それは大きな声で、どなりながら、門を開いたのは、まさしく怪物であった。

「ばけものたち、何しにここへまいった。」と八戒と悟浄をどなりつけた。

「なに、ばけものだって……ばけものは、それおま

えの方ではないか。おれたち二人はな、猪八戒と沙悟浄と云って、三蔵法師さまのな、おともをしているものだ。おまえこそなにものだ。」

「波月洞の王さまの、黄ほう郎と云うえらい者だぞ、おそれいったか。」

「波月洞の王だと、おそれいってたまるか、おまえ、みただけでわる者らしい顔してるな、お師匠さまをさらったのはおまえだな。このばけものめ。この八戒さまのまぐわの味を、くらってみな。」

八戒は、九本ばのまぐわをふるって、ぶーんぶーんと音を立てて黄ほう郎にうってかかっていった。「きうよだい、しっかりやれよ。」

悟浄も、宝じょうをふりかざし、ふりながら、黄ほう郎をせめたてた。

二人に一人だから、すぐ勝負がつくと思っていたが、なかなか、そうはいかない。黄ほう郎の力には、二人ともたじたじで、次第次第にあとずさりすると云う形である。

「悟浄、こいつ、ちっとでございぞ。」

「きょうだい、わしはつかれたよ。こちらで一休みと云うことにしてはどうだい。」

「よしきた。にげるまねでもするか。」

二人は、わざと逃げだした。

「ははアこの弱虫め。」

黄ほう郎は勝ったつもりで、門の中へもどって行った。八戒と悟浄が、そのすきに、こっそりと、うら門へまわったのには気がつかない。

かなしい姫

さて、三蔵法師は、どこにどうしていたであろう。黄ほう郎にとらわれて、波月洞のおくにとじ込められていたのであった。

「八戒よ、悟浄よ、早く来てたすけてくれ。」

身体をもがいている処へ、ひとりのむすめが、しずかに現われた。そして、

「お坊さま、なぜこのような処へ、おいでになったのですか。」

「すきできたのではない。わたしは観音さまのお云いつけで、天竺へ経文をとりに行く者だが、たべものをさがしに出た八戒と悟浄と云う二人ののしものあとを追って、この寺の門まで来たところ、いきなりつかまってしまったと云うわけです。」

「まあ、お気のどくなお坊さん。この主人は、おそろしいもので、人間を食べることさえもありません。こうしていると、あなたもあぶないです。わたしが、おたすけしましょう。」とむすめは、法師のなわをといてくれた。

「ありがたい。……おかげで、からだが自由になった。お礼には、なにをさしあげたらいいだろう。」

「いいえ、お礼なんかいらませんが、もしも、なにかして下さるお心なら……」とむすめは、あたりをみまわして、口ばやに、云うのであった。



賀 正

〃	〃	東 京	川 口	〃	東 京	横 浜	東 京
鷺 [〃] 見 保 佑	菊 [〃] 池 仁	桐 [〃] 木 光 三	飯 [〃] 塚 孝 司	小 [〃] 佐 野 賢 治	佐 [〃] 野 友 二	岩 ^顯 本 ^問 勝 俊	石 ^顯 橋 ^問 湛 山
飯 能	〃	〃	名 栗	東 京	名 栗	〃	東 京
武 ^監 居 ^事 藤 吉	岡 [〃] 部 千 三	町 [〃] 田 真 之 亮	有 [〃] 馬 忠 直	平 ^責 岡 ^任 く に	平 ^代 沼 ^表 弥 ^役 太 ^員 郎	渡 [〃] 辺 綱 雄	船 ^顧 口 ^問 暉 子
東 京	青 梅	川 越	坂 戸	狹 山	東 京	〃	名 栗
若 [〃] 林 と く	小 [〃] 峰 久 治	斉 [〃] 藤 新 作	平 [〃] 井 敏 治	井 [〃] 上 武 吉	今 [〃] 津 政 雄	平 ^護 沼 ^持 宏 ^役 之	平 ^監 沼 ^事 幸 一



賀 正

"	"	川 越	東 京					東 京			
福岡 広吉	福田 富八	斉藤 新作	桜田 久	東光電気				杉山 慎	東光電気会長		
浦 和	与 野	八王子	名 栗	"	"	"	"	川 越	杉 並	大 阪	
田島 一夫	福田 忠彦	阿部 末吉	原田 亀三郎	(武)木 材	原田 愛助	川上 善之助	熊本 潔	長田 謙	森田 角三郎	栗原 通任	青 武雄
松戸市	袋井市	名 栗	鎌 倉	名 栗	"		東 京	飯 能			
相台 宗次郎	原田 亮裕	鋼管鋳業株式会社 武蔵野鋳業所		小糸 源六郎	浅見建設 浅見 清		石毛 富貴子	石毛 銀一	埼玉県議会議員 石井 泰彦		



賀 正

飯 能	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東京	松戸市							
田中一誠堂株式会社 社長田中鎮次	常光 浩然	重宗 雄三	鈴木 正治	中村 兼文	山下 直衛	土橋 隆	相台 淳吉								
芦屋市	〃	〃	〃	東京	〃	〃	〃	清水市	東京	〃	川越	入間市			
郡司 茂	渡辺 豊	渡辺 万助	渡辺 八重	遠山 冢治	早稲田実業純実会	松田 揖夫	松田 珉山	松田 杏山	松田 承風	松田 江畔	伊藤 正雄	勝見 健三	金子 寅吉	繁田 甚三郎	
〃	〃	〃	〃	東京	佐久市	逗子市	〃	〃	東京	新座市	〃	〃	東京	芦屋市	
多々良 殿	大森 広吉	横山 高輝	石村 幸一郎	法政大学 昭四会	福島 鵬太郎	榊田 雪子	上野 きく子	平沼 精一	森田 準一	津吉 秀也	宇野 光子	横沢 宣行	横沢 正明	横沢 まつ	郡司 進



賀 正

"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	東 京	
加藤 源藏	稲村 精一	白井 いせ	内田 豊子	平野 金次郎	上野 広治	的場 由恭	一杉 歌次郎	柴田 務	永沢 敏男	甲賀 寿男	矢島 重五郎	深谷 文吉	練馬 鳥居觀音講	高島 令三	山口 直平	
板 橋	"	"	"	"	"	"	東 京	浦 和	東 京	大 宮	東 京	松 戸 市	福 生 市	"	東 京	
三 瀨 仁	長 瀬 弓 彦	加 藤 宮 士	清 水 圭	齊 藤 長 寿	久 保 浩	埼 銀 練 馬 支 店	木 利 静 野	山 名 酒 喜 男	福 田 富 一	二 宮 謙 三	大 高 義 賢	古 郡 繁 次	近 藤 春 義	田 村 治 平	菊 池 武 雄	奥 山 則 男
練 馬	横 浜	名 栗	川 崎	秩 父 市	東 久 留 米	富 山 県	東 京									
山口 貴美子	岡野 貴美子	孝道教団副統理	名栗木材株式会社 社長浅見逞次郎	宮田 留吉	柿原 康治	山本 スギ	天 暁 庵 主	東 洋 ハ ウ シ ン グ 株 式 会 社								



賀 正

東 京	浦 和	日 高 町	浦 和	東 京	加 須 市	"	東 京
平 沼 杉 之 助	島 田 森 雄	高麗川 カント トリ ークラ ブ	千 葉 寿	友 松 円 諦	宇 和 野 拓 植	黒 川 武 雄	谷 善 之 亟
"	"	"	"	"	"	"	東 京
富士倉運 輸株式会 社 社長 前田 安彦	下世古 八雲 商 事	篠 秀 雄	取締役 二宮 謙 三	取締役 高 山 重 郎	取締役 松 本 四 郎	常務 大 木 清 二	船橋ヘル スセンタ ー 社長 山根 春 衛
川 越 市	川 口 市	大 分 県	"	"	"	"	東 京
山 崎 嘉 七	増 田 金 蔵	大泉寺 別所 竜 城	取締役 網 野 久 一	" 滝 沢 弘	" 清 水 喜 久 雄	常務 川 島 源 次 郎	専務 広 住 温



賀 正

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東京
長谷川 正男	山本 博男	会川 達雄	古筆 丈文	室田 由雄	杉山 義喜	原藤 春雄	島田 森雄
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東京
高瀬 亀喜	荒谷 森児	坂詰 八郎	河野 智彦	大矢 守藏	福田 善昭	森川 茂男	赤羽 暁
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東京
宮本 享	白山 暁	安藤 秀三郎	山本 一雄	服部 <small>専務</small> 雄次	服部 <small>三信工業株式会社長</small> 雄太郎	長岡 利重	城水 芳次郎



賀 正

"	浦 和 市	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	東 京	
長 島 恭 助	石 坂 泰 三 <small>埼玉銀行</small>	小 林 頼 四	清 水 雄 治	武 石 次 男	塩 治 寛 次	宇 佐 美 誠	本 木 幹 彦	岡 田 和 夫	堀 豊 泰	麦 倉 忠 彦	元 井 春 道	後 藤 英 男	高 橋 一 郎
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	浦 和 市	
新 藤 義 雄	松 本 五 良 策	尼 崎 謙 一	高 木 菊 蔵	堀 込 聰 夫	福 原 弘	大 木 恒 四 郎	松 平 忠 晃						
新 宿 区	世 田 谷 区	豊 島 区	"	"	"	"	浦 和 市						
京 極 栄 子	船 口 暉 子	来 馬 秋 子	永 田 武 彦	松 本 弘 道	熊 谷 保	持 木 豊	相 島 斌						

賀 正

鴻巣市	大宮市	久喜市	川口市	熊谷市	羽生市	上尾市	吹上町	浦和市	吉見村	行田市	東松山市	嵐山町	川越市	毛呂山町	大宮市
荒井忍	渡辺尚宣	岡安健二	青木宏夫	高瀬紀	小倉今朝巳	堀田博光	根岸栄一	比留間豊夫	古杉孝行	松岡潔	神田明雄	馬場恒次	関賢寿	岩崎恒雄	間庭正二
〃	〃	〃	〃	大宮市	大宮市	〃	〃	浦和市	伊奈町	〃	〃	上尾市	浦和市	大宮市	白岡町
横溝喜久雄	〃	〃	第一火災海上 保険相互会社	東京海上火災 保険株式会社	〃	〃	〃	千代田火災海上 保険株式会社	石坂昇	比田井敏明	石川智三	飯野利光	佐藤文一	松本義勝	〃
深谷市	〃	〃	本庄市	寄居町	〃	〃	熊谷市	加須市	川口市	〃	浦和市	〃	〃	〃	浦和市
野口定雄	新井健一郎	三ツ間陽一	田口次作	保泉敏夫	橋本正勝	富田邦夫	新井洋	鶴田昌保	中野政孝	黒沢洋一	〃	〃	〃	〃	〃



賀 正

〃	鴻巣市	〃	本庄市	〃	東松山市	行田市	〃	〃	〃	〃	〃	熊谷市	〃	児玉町
吉村秀晴	綿貫富雄	清水光雄	茂木勝	新井徳治	栗原利男	諸貫忠久	福原政明	船田栄	茂木晋二	佐藤喜三郎	斉藤辰雄	猪野一夫	佐藤寿夫	根岸惟夫
八潮市	春日部市	八潮市	浦和市	南河原村	〃	羽生市	〃	加須市	児玉町	川里村	大宮市	望月盛隆	前田元治	茂木俊雄
関留義	渡辺友次	勢理容雄	小沢恒介	中野一郎	清水栄	荒井正美	加藤清正	酒井吉彦	茂木俊雄	前田元治	望月盛隆	加須市	岩槻市	草加市
松本敏雄	中田靱男	加藤昭	新井義男	寺崎猛	藤原晃紀	平石博勇	渡辺久雄	浦和市	朝霞市	春日部市	蓮田市	鷺宮町	浦和市	朝霞市
加須市	岩槻市	草加市	蓮田市	春日部市	朝霞市	浦和市	鷺宮町	浦和市	朝霞市	春日部市	蓮田市	鷺宮町	浦和市	朝霞市
松本敏雄	中田靱男	加藤昭	新井義男	寺崎猛	藤原晃紀	平石博勇	渡辺久雄	浦和市	朝霞市	春日部市	蓮田市	鷺宮町	浦和市	朝霞市



賀 正

〃	入間市	〃	〃	〃	〃	〃	飯能市	大宮市	岩槻市	庄和町	千葉県	岩槻市	越谷市	大利根町	庄和町
原田 正美	宮岡 光男	小沢 久雄	秋元 美津江	野口 元司	平 孝男	浅見 一雄	青木 邦雄	落合 隆二	関根 恒雄	鈴木 英夫	中村 吉継	伊藤 雄一	松沼 喜恵知	橋本 新一	前島 進
栃木県	白岡町	〃	〃	大宮市	〃	〃	上尾市	名栗村	〃	日高町	〃	越生町	〃	〃	入間市
中田 貞夫	加藤 洋治	常見 武男	藤倉 利男	川野 博通	藤波 隆治	松本 誠	丸山 久蔵	小峰 一男	大川戸 要吉	大川戸 岩夫	浜野 博己	石井 道代	大矢 浩平	河野 政男	古谷田 静男
行田市	熊谷市	浦和市	〃	与野市	北川辺町	〃	吉見村	東松山市	〃	茨城県	栗橋町	花園村	川越市	群馬県	羽生市
中島 寛亮	大井 博	星野 謙三	稲村 喜美男	矢島 繁	増田 福男	大山 伯之	沖田 光次	贄田 久雄	野村 輝雄	中川 一郎	白井 一郎	杉田 敏夫	高橋 きみ子	小川 純一	富岡 赳



賀 正

三芳町	熊谷市	宮代町	北川辺町	岩槻市	浦和市	日高町	坂戸町	飯能市	"	大宮市	鴻巣市	川口市	"	深谷市	行田市
岡部亮介	近藤七郎	田中弘次	永塚正夫	須賀一男	見富貢	斉藤勝巳	吉山喜久夫	安藤敏雄	川辺武夫	工藤勝彦	村田征二	小園子利行	新井通男	籠島政春	島田友五郎
"	上尾市	上尾市	"	秩父市	"	皆野町	熊谷市	騎西町	北川辺町	菖蒲町	行田市	加須市	"	羽生市	
高橋勇	新井節夫	大滝孝	斉藤清	西文雄	永田鉄之助	石井光一郎	山口素	若林二郎	荒山五男	福井精治	渋沢修	島崎隆雄	斉藤昇	岡田孝徳	
大井町	白岡町	吉見村	与野市	蕨市	川口市	与野市	戸田市	上尾市	浦和市	"	大宮市	野上町	熊谷市	"	北本市
三条秀男	大久保良一	新井和明	佐藤均	渡辺新一	小林文久	青木博	永井秀信	鍋谷清志	中村正夫	佐藤昇治	黒田明	小林博	石田征司	芳村寿久	小沢俊勝



賀 正

川口市	川越市	日高町	鶴ヶ島町	小川町	"	"	"	"	川越市	"	坂戸町	越生町	"	"	飯能市
松岡 寿	斉藤 勝則	真野 信治	鹿川 久美男	清水 英明	牛窪 健	横関 良雄	荒井 安雄	沢田 仁司	山岡 一雄	田中 耕作	中島 健	畑 一男	内田 政治	清水 利男	土屋 芳男
日高町	岩槻市	上尾市	新宿区	大宮市	東松山市	浦和市	蓮田市	"	川口市	戸田市	北本市	"	大宮市	東松山市	
嶋田 保	古田 勝蔵	大川 長信	山沢 隆一	天海 秀夫	千原 元	岡 謙司	山口 政志	佐藤 公樹	尾熊 祐三	細井 幹夫	岡田 功	小島 武夫	武田 安弘	新井 茂	
大宮市	"	"	浦和市	所沢市	新座市	上福岡市	志木市	練馬区	大宮市	入間市	"	所沢市	富士見市	吹上町	熊谷市
浪江 和夫	実戸 忠治	吉田 明德	平野 章	安田 正吉	高橋 智	宮倉 善光	菊地 寛修	土橋 孝志	小池 康夫	小沢 幸一	吉田 猛	藤野 隆	青木 哲美	稻沢 吉春	牛島 照晃



賀 正

鴻巣市	飯能市	上尾市	川越市	"	"	大宮市	"	"	"	浦和市	"	与野市	岩槻市	飯能市	大宮市
久保田 忠治	真柄 勇	安藤 延男	金野 裕	宍石 紀一	矢島 一男	平沼 一幸	高野 貞夫	五十嵐 稔	後藤 光久	岡部 政雄	松本 功	天野 富雄	石田 照男	高野 昌保	黒須 達児
"	"	"	"	東京	鴻巣市	"	浦和市	春日部市	大利根町	加須市	大宮市	"	熊谷市		
田中 つぎ	広瀬 克通	広瀬 寿美	広瀬 太吉	川嶋 久幸	花木 孝	宮野 孝	竹村 実	松本 光行	樋口 智	沢田 貞	長谷川 栄二	井田 四良夫			
御申込順に 掲載させて頂きました	名 栗	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	東京			
	小林 高安	鳥居観音住職	平沼 とみ	奈良 政子	若林 とく	若林 五郎	西島 達夫	浜崎 国男	実戸 睦子	新川 つる	坂野 シゲ子	木村 その	宇山 たま子	小林 ハム	

「わたしは、このまものなかまではありません。ここから三百里いくと、宝象国ほうきょうこくという国があります。父は国王で、わたしの名は百花しゅう、と云っています。十三年前の十五夜の晩に庭にでて月をながめているところを、黄ほう郎にさらわれて、ここへつれてこられたのです、父は、わたしがここにいるのを知りません。父に手紙をかきますから、父の城へとどけてくださいませんか。」

「よろしい。話をきくと、きのどくなのは、あなたの方だ、はやく手紙をかきなさい。たしかにとどけてあげるから。」

「はい。おねがいたします。」

百花しゅうは、いそいで、手紙をかくと、法師にわたし、法師は手紙をふところに入れて、こっそりうら門を出ようとしたとき、

「おししよさま。」「……………」

八戒と悟浄が、かけつけてきた。そこで三人は、手をとりあって、ぶじをよろこんだ。

「よかった、よかった。このうえは、すこしも早く

宝象国へいって、姫のことを知らせよう。」

三人は、宝象国へいって、国王に手紙をわたした。

百花しゅうからの手紙をよんだ国王は、大へんよろこんだが、姫を助け出すには、さてどうしたらよいかわからなかった。

「わたしのともの者は、力もつよく、たたかいになれていますから、きつと姫を助け出すことができるでしょう。」

法師は、八戒と悟浄を国王のまえに呼び入れると、国王は二人の顔を見ると、びっくりして、いすからころげおちそうになった。

「こ、これが、あなたのけらいですか。」と国王は、がたがたふるえだした。

「さよう。顔はこんな顔だが、二人とも心はきれいさっぱりとしたものです。もと天上にいたこともありますので、ふしぎな術も知っていますから、黄ほう郎にまけるようなことはありませんまい。」

「おししよさまのおっしゃるとおりです。ろんよ

りしようこ。ひとつ、術をごらんにいれましようか。」と八戒が、ぶるつと体をふると、三十米もある大男になった。

「わたしの術も、みてください。」と、のっそりのっそり悟浄がまえへでた。

「けっこうです。もうたくさんです。」

国王は、うすきみわるくなつて、悟浄の術はやめさせた。

「それだけの術をおもちなら、黄ほう郎にまけないと思います。どうかおねがいます。姫をつれもどしてください。」

そこへ、けらいが酒をはこんできた。

法師は、酒をのまないの、さかずきには手をふれない。しかし八戒と悟浄は、目を細くしてよろこんだ。

そしてぐいぐいので、大変な元氣だ。

「では、波月洞へいってまいります。姫はかならずとりもどしてきますから、おししようさまも国王さまも、あんしんして、おまちください、さあ、いこ

うぜ、悟浄。」

「いいとも八戒。」

二人は、雲をよんでのりうつり、たちまち空遠く、とんで行った。

波月洞では、黄ほう郎がぐうぐうねているところへ、てしたの者がとびこんできて、

「へんなやつがきました。門をこわそうとして、ひどくたたいています。」

「へんなやつとは、どんなやつだ。」

黄ほう郎は、鉄の棒をさげて、門の方へ出ていった。

「門をたたくのは、だれだ、しずかにしろ。だれがきてもおどろかないぞ、さっきも悟浄とか八戒とか云うばけものがきたが、わけもなくおいかえしたんだ。」

いいながら門をひらいてみると、目の前に顔をつき出したのが、その八戒と悟浄だから黄ほう郎はあきれてしまった。



「いのしし
と、大入道
め又きた
か。」

鉄棒をふ
りかぶつて
二人におど
りかかった
から、二人
は左右に身
をかまし
た。

「黄ほう郎
よくきけ、
おまえは。
宝象国の姫
をさらって
きたな。そ
して十三年

も、ここにとじこめておいたとは、まことにわるいやつだ。そこでおれたちが姫うけとりに来たのだ。さあ、姫をわたせ。」

黄ほう郎は「なにおぬかす。」としらばくれようとした。

また、二人と一人のはげしいたたかきとなったが、一時間、二時間たっても勝負がつかない。

「悟浄、おれはちょっと休む、おまえ、しばらく一人でやってくれ。」

八戒は岩のかげにかくれて、大きいいきをした。そしてつかれたためか、いねむりをはじめた。

八戒と二人でもかなわないう黄ほう郎には、悟浄一人ではかなうわけがない。岩かどにおいつめられ、宝じょうをはねとばされた上、なわでぎりぎりしぼられてしまった。

「大入道、まいったか。はっはっは。」

黄ほう郎は、悟浄のあたまを、鉄の棒でこつこつたたいて、大わらいした。

(以下次号)



田舎医者（其の五）

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

手 三

早春の太陽が、紺碧の空をじかに通して、矢のようにはやくてりつけると、いっせいに那須連山の雪崩が始まり、その巨大な雪の塊りは山と溪谷をゆさぶりながら這松と石楠花と雁紅蘭の灌木の林へ流れこみ、その木々の間で、残雪となって初夏まで残る。

やがて、南からの緑の風が、暖かく雪面を撫ぜると、雪どけの小さな流れが谷間に集まり、水かさが増し、速い大きな溪流となって岩をかねて流れ、その真白い泡の中から岩魚や、山魚女がナイフのように腹を光らせて跳ぶ。

毎年このころになると、植木屋の与平さんは那須

岳から旭岳、三本槍岳を歩きまわり、ご法度の五葉松と石楠花を盗む。那須連山の五葉松は中でもない値で売れるのだ。

そして或る日。植木盗っ人の与平さんは、山の中でとんでもないものを見つけ、あたふたと馳けもどって駐在に云った。

「ひ人、死んでるんだ!! 三本槍の這松林の雪ん中さ人死んでるだ。俺行ったら、雪ん中からゴム長の爪先が二つ、首つん出してただ。赤え女もんの長靴だったワ。見えたなア靴だけだったが、たしかに雪ん中さは人が死んでるにちげえねえだ。俺、腰抜かすほどびびくりして、そこでここさ、報告にとんで来ただ」

「それ本当か？ 間ちがいねえだべかな？」

駐在の茶晶巡査が云った。

「この目で見たんだぞ、間違いないだともサ、俺がそんなゴジャッペ云うわけあんめえがナ」

「んだんべがな、そうだと奥山までわざわざ検屍に出かけてって、長靴だけ落っこつてたなんてんだら承知しねえぞ」

駐在が念を押すと、

「いいや、たしかに死びとだぞあれは。俺そつとけつとばしてみたらドスンと重かっただ。中身がはいつてるだあの長靴ア」

「なある程な、そんだら本当かも知んねえな。だがオメエ、何んだってあんたとこ歩ってたんだ？まさかこの前みてえに、高山植物かっぱらってたんじゃあんめえ？」

駐在がきくと、与平さんがあわてて云った。

「と、とんでもねえぞ茶晶さん。俺あこの前あんだにとつ掴まってからア、一度だって、もう盗んだりしねかったぞ！今日だってその通りだわナ、俺が本当に盗んでだら、わざわざあんたとこさなんか報ら

せに来るはずねえだべがよ。今日は俺ア、ただ、ハイキングつて奴をやつてただけわナ」

「ヘエッ、オメエがなあ……。俺はまたハイキングなんてもなア東京の人がやるもんだべえ思つてたが、オメエまでがなア」

「なにもあんた、変てこなこたアあんめえがな。俺だって、たまにアほれ、あのレクレーションに行くだわナ」

与平さんが盛んに英語を使って弁解しても、駐在は信用なんかしない。

「まあ、しょうがねエ、今日んところは大目に見とくべ、せつかく報らせにきたんだからなア。だけんどこの野郎、もしそれが靴だけで死びといねかったら、ただじゃすませねえぞ。いいな？」

すると、植木盗っ人が頭をかきながら、

「間違えねえべと思うだが、俺雪ほつて見たわけでねえもんな。でもやつぱり間違えねえな、あれアたしかに死びとだわ。」

与平さんがそう云うのだ、駐在と役場の係員と私

は彼に案内させて、しかたなく検屍に出発した。その日、快晴の日曜日であった。都会から来たハイカーたちが、絵具のように鮮かな赤や黄や青のリュックサックを背負い、口笛を吹き、外国の歌を唄いながら、ぞろぞろ続いて新緑の山を登っていった。その横を追いぬいて、私達の人足のような灰色の団が、不機嫌に黙りこんで登った。

「せっかくの休みを、俺アたちア変死人のあと始末かえらいこっちゃ!!」

役場の若い衛生係が云った。するとひょうきんな茶島巡査が、もつと怪しからぬことを云うのだ。

「雪ん中から死人掘しんどってきて、ここさ転がしておいたら、あとからくるハイキングの女っ子らア、たまげて、どうするだベナ」

北温泉の沢を渡って、大倉山の急坂を一気に登ると、汗が背すじを伝ってかかとまで流れた。そして、そこからは白樺とぶなのうっそうとした原生林を通る。大るりがるり色の羽を光らせてぶなのてっぺんで、さえざり、うぐいすが低い弧を画いて鳴き

ながら谷を渡った。

「この辺にア仔ひき熊がよく出てくるだぞ、先頭は気づけて歩け!!」

与平さんが声をかけると、若い衛生係が、ギョッと立ちどまり、そして一番うしろへ廻った。だから、私も真中へんに割り込むことにした。熊の爪にひっかかれた傷はひどい。私は何人もそれを診ているのだ。

「あんまり気もちいいとこでねなこの辺は。こっから先、まだだいぶあんのかア?」

茶島巡査がきいた。

「いや、もう造作ねえだ。あとちつとんべえだわナ。も一寸行くと這松んとこサ出るだが、そっから先ア雪だ。すべって谷ん中サ落っこちんなよ。深え谷だぞ」
植木屋が云った。どつちみち、あんまり愉しい山遊びじゃないのだ今日は。

ぶなの林をぬけると、パツと明るい灌木の広っぱに出た。這松や、石楠花の間に残雪がひろがり、もう初夏の太陽が反射してめまいがするほど眩しかっ

た。

「さアもうちつとだぞ、すぐそこだ。だが……俺、心配えになつてきたワ。もし長靴だけぶん投げてあつて、死人いねかつたら、俺どうしつぺと思つてヨ……」

与平さんがモジモジ始めると、茶島巡査が、

「コノヤロ、ここまで俺達引つ張つてきといて、今更なにを抜かしやがるだ。もうし、死人いねかつたら、ただじゃすまねえぞいいか、虚偽の申告、公務執行妨害、高山植物窃盗容疑、こんだけでもまア、たつぷり一年は食らいこむぞ。なア、あんただつてこのまま勘弁しやしめえ先生？」

茶島巡査が私に云つた。

「そうだな。私はヒマシ油うんと吞ませて、十日も腹くだりさせてやるヨ」

岩角を一つ曲ると、白い雪の中に真つ赤なゴム靴があつた。

「ほーれな、これだ。この靴ア、たアだ落つこちてるんじヤアねえど。雪の下にア間違いいねえ人が死ん

でる。な、オメもそう思うべ？」

与平さんが私に云つた。

「いいかほれ、みんなよく見てろや、こうやつて動かしてみたつてピクとも動きアしねえだ。中に足がへえつてる証拠だべこれア」

彼が突き出た赤い爪先をゆさぶつても、きゃしゃな、小さい女物のゴム靴は、やっぱり木の根つこのように動かなかつた。

「どうだ、俺云つた通りだべ。俺アうそなんか云つたことねえだぞ。五葉松だつて、はア盗んだりしねえのに、この茶島さんは俺の顔見せえすりヤアおどかすだアははは。」

植木盗つ人の容疑が晴れた与平さんの安心した笑いが、真白い雪の上を転げていった。

だが、与平さん以外の誰の顔も、もう笑つてはいない。あの、ひょうきんな茶島巡査さえ、さつと緊張し、方々の角度からカメラを向け現場写真を何枚もととり、磁石をみながら正確な位置をよみとつていた。

(以下次号)

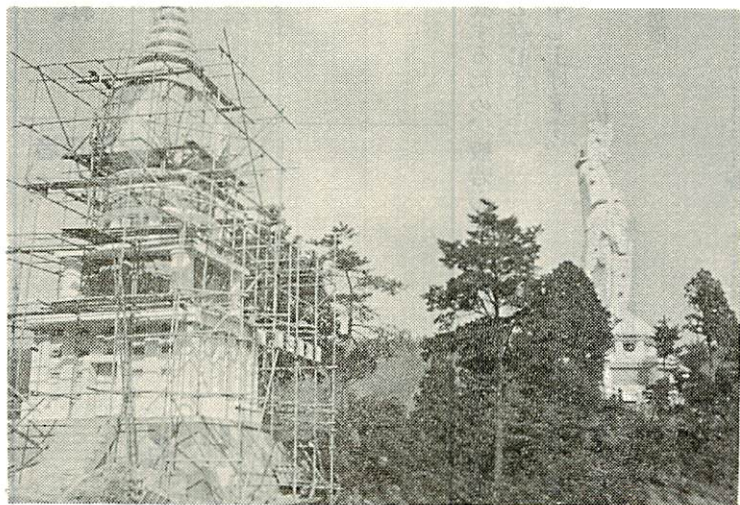
納経塔の工事経過

救世大観音の近くの面白岩上に、高さ十四米の納経塔が一ヶ年前から、三信工業により建設中の処、漸く外面は出来上って、足場も取除かれまして、現在は内部工事をやって居ります。

「アフガニスタン」「パキスタン」地区に今より千数百年前に数百年の間、大乘仏教が最も殷盛を極めた「ガンダーラ」地区があります。又世界一と言われる「パーミアン」の大石仏や、東西をつなぐ只一本の名高い通路「カイバル峠」を越えた所にある発掘中の「ハツダ」の遺跡も巡拝しましたが、其の規模は雄大、精緻なものでして、三蔵法師の西域記にても当時がかがわれます。

建築中の納経塔は、この「ガンダーラ」地区にある仏舎利塔が、中々よいデザインなので、其の一部を取り入れたものです。

合掌



納経塔より見た救世大観音

写経折本申し込み用紙

写経用折本巻数	ご住所	取扱者
		ご芳名

この納経塔内には、救世大観音内の一万体観音を供養するため、般若心経一万巻の写経を広く勧進中ですが、今年秋にはこの落慶式と納経式を挙行致し度と存じます。

何卒この悲願達成に皆様のご写経のご協力をお願い申し上げます。

合 掌

御申し込書送り先

埼玉県入間郡名栗村鳥居観音寺務局

電話(〇四二九七〇四)二七五

練馬区小竹町一ノ五二 鳥居観音東京事務所

平沼弥太郎方 電話(九五五)〇四六五

お払込先

埼玉銀行名栗支店鳥居観音口座

埼玉銀行練馬支店

〃

鳥居観音だより

盛大に終了した夏の諸行事

八月十六日孟蘭盆、午後五時から本堂で、千余灯の流灯供養を小林老師、鯨井の二師によって執行いたしました。開祖平沼先生ご夫妻始め、福徴講元新妻治郎殿、川越の親友講元齊藤新作殿の一行五十名、板橋から榎本みや子殿ご一行五十名、瑞穂町鈴木つる代殿ご一行三十名（泊り込み）其の他がご参列くださったので、本堂はあふれるばかりでした。

ようやく涼風が園内から流れて堂内に及ぶと、参列者の読経の声も一層高まりおごそかな中に、おのずから精霊に対して、供養の心となぐさめの心がわき起こりました。

一灯、一灯の精霊の読み上げがなされて、式は午後六時終了しました。

午後七時から流灯を名栗川に於て執行しました。

供養灯を一灯一灯川原まで移動するのは大変ですが、信仰深い方はご自分で川原までお持ちになって流灯なさいました。

点灯された絵模様灯の灯ろうが、波にのって川一ぱいに散りひろがった時、この行事のありがたさを誰もが感じました。

午後七時三十分流灯の中頃から名栗川畔から花火の打ち上げが開始されました。

特に仕掛花火の美観は名栗川にかけられた菊花園につづいてナイヤガラ滝など観衆の目をうばいました。

盆踊りは空の花火に呼応するように、広場で始まり、観衆の中からの参加者は次第に殖えて、中央のやぐら太鼓の音につられ、民踊や、音頭におどりの輪をひろげて、善男善女、老も若きも、さまたのしそうに踊りました。

本年もセンターに予約されて、この行事のすべてに参加くださった方々もありますので、益々発展することと思えます。

秋の例大祭

十一月十七日(金)午前十時三十分から、本堂、玄奘三蔵塔、救世大観音へと法要が進められました。

浦和から関根二殿が引卒された、浦和講七十名のご参拝を始め、篤信各位多数のご来山をいただきまして盛大に執行出来ました。

紅葉も真盛りで、天候にもめぐまれましたので、皆様大変よろこんでおられました。

紅葉と来山状況

今年の紅葉は少しおくれましたので、例大祭には真盛りのところをごらんいただきました。

この前後を通じて、各方面からの来山があり、九月二十四日、大井から神戸後援会及いなげ講の方々百名、十月に練馬から平沼杉之助様のご一行七〇名二十九日青少年義勇軍大和拓勇会の方々三十名来山吉野桜五十本を寄贈いただきました。

十一月に入って十日には熊谷から三十名初のご来山と、青梅講元宮沢様外五名代参、折からの紅葉に一そう引立った救世大観音の慈顔を心ゆくばかり仰いでおられました。

十一日には松田江畔先生のご関係の書道会の方が来山、庫裡で習字を練習なされ、思い思いに筆をふるわれました。

十六日、入間郡の民生委員幹部二〇名、来山、民生福祉の協議をなさいました。

二十日は江端政吉様ご一行七十名が心ゆくばかり自然のよさをめでられました。

二十一日所沢の小山権之丞様の御一行五十名の来山がありました。

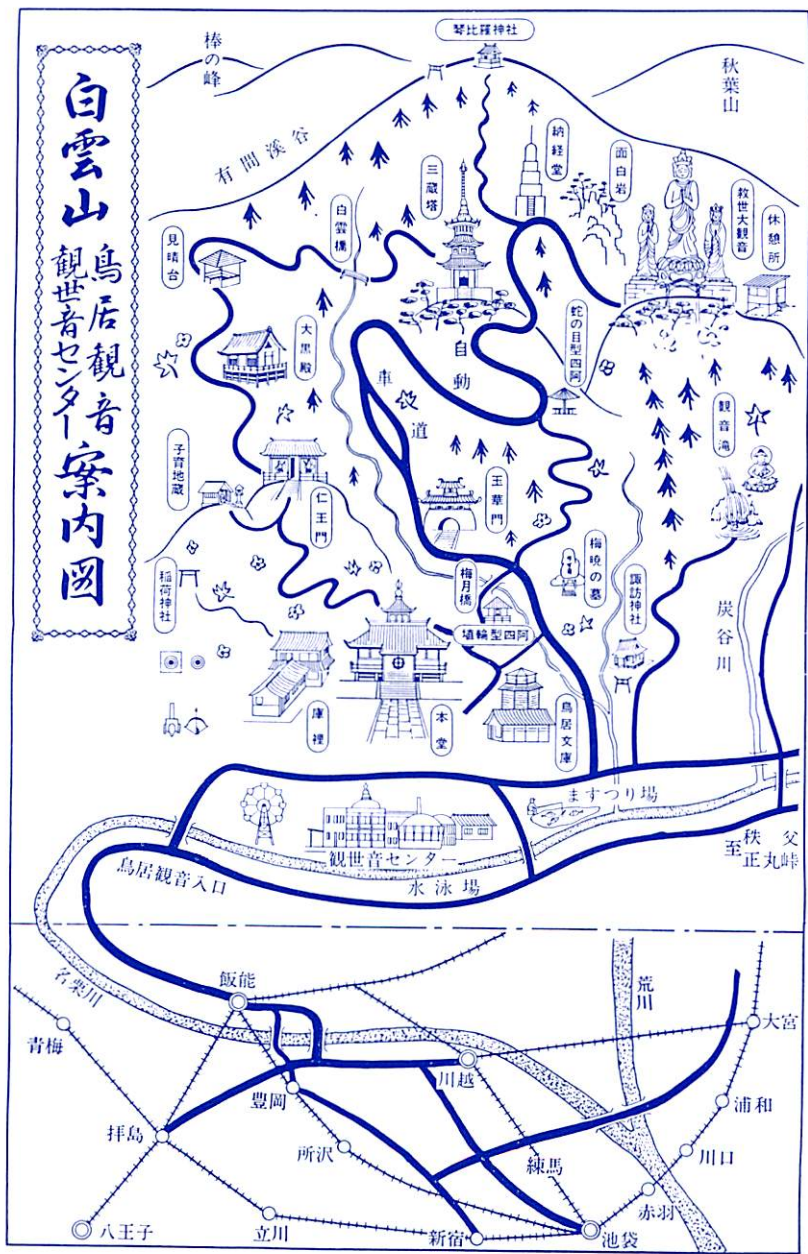
とりる 第二十五号 発行日 昭和四十八年一月一日

編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人

印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音電話〇四二九七〇四、名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



春 の 行 事

- 新年祈禱会 1月1日午前10時より3ヶ日執行します。
願意 商売繁昌 家内安全 試験合格 安産
交通安全 諸病平癒 その他
祈禱料 金五百円 金壹千円 金貳千円以上
申し込 12月末日までもしくは当日受付も致します。
尚祈禱は常時御申込を受け執行いたします。
- 節分会 2月3日午前3時より本堂に於て法要終了後
福豆をおわけいたします。
- ねはん会 2月15日 本堂に於て供養
- 春の彼岸会 3月21日 午後1時より法要、引続念仏会執行
- 花まつり 5月8日 午後1時より本堂に於て執行
(月おくれ)

花 の お 知 ら せ

- 3月下旬から三つ葉つつじの紫が山内一ぱいに咲き、一番
気持のよい時となります。その他 梅 さくら 山吹きと
咲き乱れて、遊歩道の散策には、絶好の時です。